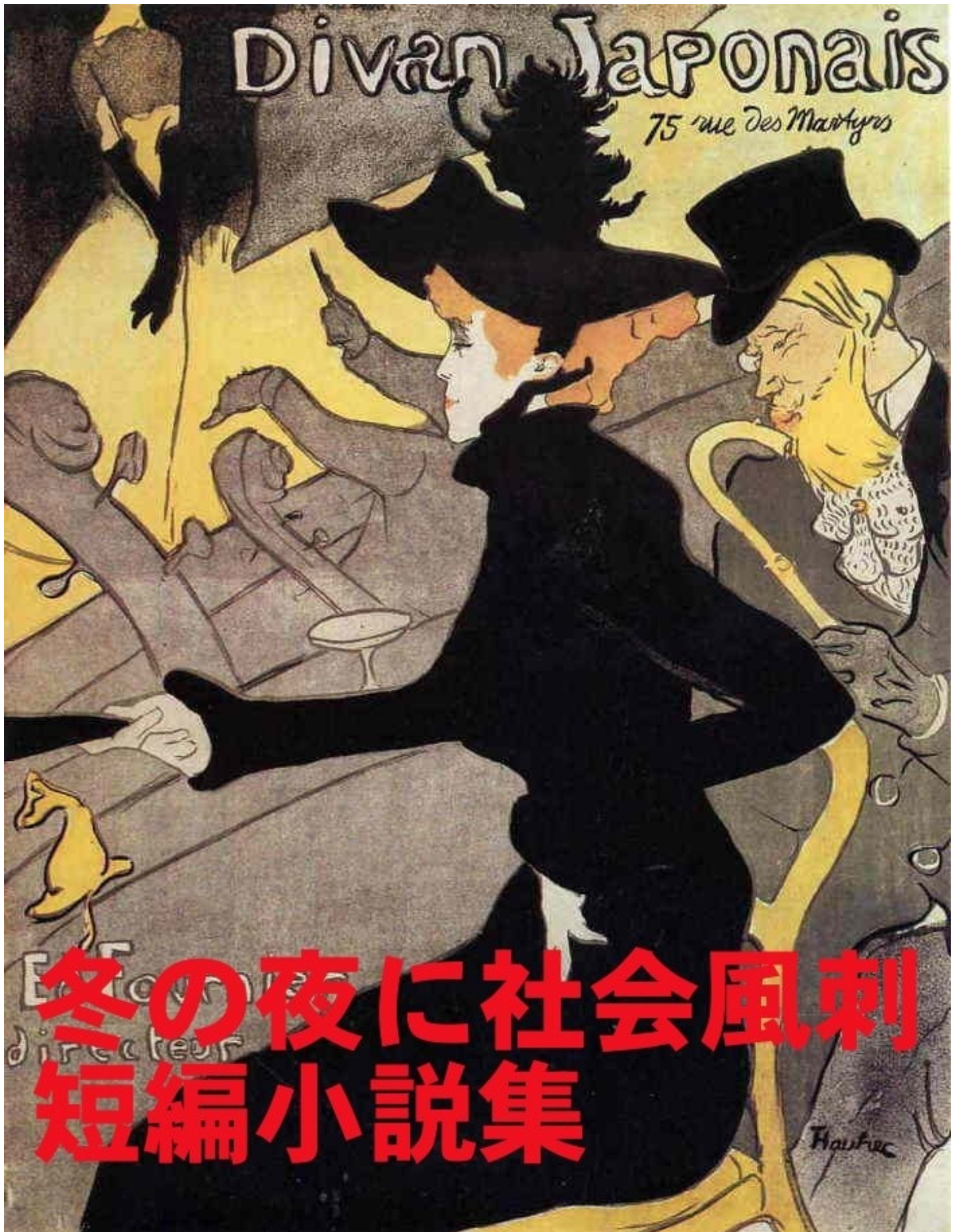


Divan Japonais

75 rue des Martyrs



冬の夜に社会風刺
短編小説集

「24時間生中継で大臣の失言を監視する仕組み」

日本では、大臣が失言を連発し、責任をとった総理大臣の辞任も続いていた。何故大臣の失言がすぐニュースになるのか。大臣の日常を二十四時間ネットの動画サイトで生中継しようという情報公開制度が、国会の審議を通過したためだった。

大臣は就任後、小型のデジタルカメラで二十四時間撮影されることになる。カメラがとらえた映像は、ネットの動画サイトに二十四時間アップされ続ける。動画に対して、視聴者のコメントがどんどんついていく。大臣は発言から行動から、全てを国民に公開する義務があるとされた。これではどんな失言も許されない。

カメラが大臣から離れるのは、トイレの時だけだ。睡眠中の大臣も、暗視カメラで撮影され続ける。大臣が寝言を言うと、寝言に対しても動画視聴者のコメントがつく。大臣は、起床後、昨晚寝言で変なことを言っていなかったか、秘書に確認することになる。

セックスさえ、生中継された。妻とのセックスなら、何のやましいこともないだろうと国会で採決された法案に書かれていた。セックスの最中、せめてトイレと同じく音声だけにしてくれないかとある大臣が申告したが、音声だけでは、妻以外の女性とセックスしている場合もあるだろうと否認された。トイレの最中も撮影した方がいいのではないかという意見も出たので、ある大臣は再反論をあきらめた。

独身の大臣は、意中の女性と結婚前、キスもセックスもできなくなった。独身の大臣が、酔った勢いでキャバクラに行って暴れたら、その映像が翌日ニュースで何回も報道された。大臣は更迭され、内閣も解散総選挙となった。

情報公開もよいだろうが、これでは政治に集中さえできない。大臣は常に失言を恐れるようになる。立派な人間たろうと努める大臣は、トイレの時だけ、自由を手にすることができる。大臣たちは、トイレトペーパーに不満を書きまくった。トイレの個室で声を出して不満を述べては、音声マイクが拾ってしまうかもしれないから、不満は文章となった。書き終わった不満は、すぐさまトイレに流された。

「さっきトイレで何か書いてましたよね？」とカメラマンに聞かれると、大臣たちは、「何も書いておりません」と丁寧な答える。カメラマンに高圧的な態度で接しただけで、ライブ中継視聴者から、上から目線でつけあがるなど、批判コメントが噴出してしまったためだ。

美貌の女性大臣の生中継動画は、特にアクセス数が多かった。彼女は、生中継を通して自己の人気を高めていった。彼女に批判的な意見も多かったが、ネット上にはファンサイトが次々できていった。

二十四時間生中継を苦にして自殺する大臣もいたが、生中継を通して国民的人気を獲得した女性大臣が、総理大臣になった。彼女は、二十四時間生中継を大臣だけでなく、政治家全体に適用すると総理就任時に宣言した。ゆくゆくは企業経営者、官僚、警察官、犯罪者などの行動も二十四時間生中継する、最終目標は、無人カメラを利用した日本国民全員の二十四時間生中継だという。国民全員の生中継動画なんて、一体誰が見るんだとすぐさま野党から野次が飛んだ。

「たとえ誰も見る人がいなくても記録するのです。防犯に利用できますし、始終見られていることを意識すれば、個人の行動に気品が生まれます」総理就任演説の翌日、彼女は暗殺された。

(この文章はフィクションです。実在の人物・団体・組織とは一切関係がありません)

「いじめ自殺は連鎖する」

とある中学高の女子生徒が遺書を残して自殺した。翌日、いじめの当事者として遺書に名前を書き込まれていた同級生が自殺した。翌々日、担任の教師が自殺した。担任教師は二十代の女性で、クラス担任になったのは今年初めてだったという。ニュースが盛り上がる中、週末には校長先生も自殺した。

自殺の連鎖はその後も続いた。翌週には同級生全員が集団自殺。同学年全員、生徒全員、教師全員が自殺していき、一ヵ月後には、学校の関係者全員が死亡していた。

マスコミとネット上での盛り上がりを反映して、自殺はその後も拡大を続ける。同じ県に住む人々が次々と自殺、周辺の県にも自殺ブームは拡大していった。自殺を控えるよう政府やマスコミ関係者がメッセージを訴えるが、訴えた本人たちまで翌日には自殺していった。

半年後、日本人全員が自殺していた。日本の国土には、自殺者の死体が積み重なっていた。日本は国家としての機能を失った。在留外国人のうち、生き残った人々は自分たちの国に帰ったが、帰国後自殺する人が多かった。海外で暮らす日本人たちは、本国に残る家族全員が自殺した哀しみに襲われて自殺していった。

日本の領土をどうするか？ 日本を国家として継続させるのか？ 国際社会で議論が続いたが、結論が出る前に、中国が日本を自国の領土にすると宣言した。国際社会の反発が出たが、日本は中国領になった。数時間を待たずして、中国本土で自殺者急増のニュースが世界中に流れた。

中国人全員が自殺した後、アジア各国に自殺者の波が拡大した。日本の中学校で女子生徒が自殺した一年後、ついに六十九億人と言われる世界の人々全員が自殺した。

こうして人類は滅亡した。人類にとっては悲劇だが、地球環境と生物多様性の保全にとっては、よいことだったかもしれない。

僕は五億年前に存在した旧人類滅亡の歴史を受験勉強のために書き記したまでだ。僕たち新生人類は、旧人類が全員自殺した歴史を反省的に学び、今の社会を築いたのだ。

(この文章はフィクションです。実在の人物・団体・組織とは一切関係がありません)

「写真集撮影中のアイドルにミサイル爆撃」

アイドルの写真集を撮影しに南の島に向かった。テレビで人気が出始めたビキニ姿のアイドルを写真で撮影しているうちに、北の空からミサイルが飛んできた。赤く巨大なミサイルが、何発も島に降ってきた。僕はカメラを投げ出して走った。スタッフたちが悲鳴を上げながら、逃げ惑う。

ミサイルが落下し、爆発が起きる。ミサイルは近くの浜辺や、港や観光店のある島の中心地にも降り注いでいるようだ。アイドルはどこに行ったのだろう。岩場の陰に隠れた僕は、アイドルの姿を追った。秋葉原で人気の彼女は、砂浜にうずくまって泣いていた。

「危ない、逃げろ」僕は叫んだが、彼女は砂浜から動こうとしない。赤いミサイルが近くの砂浜に落下し、爆風を上げている。海の家は爆破され、家屋が燃え盛っている。

赤く尖ったミサイルが、アイドルのすぐそばに落下した。爆音が轟く。白い煙とともに砂が舞い上がる。

身を潜めているうちに爆撃はやんだ。アイドルがいた砂浜の爆撃跡に向かった。生き残ったスタッフたちも、爆撃跡に集まってきた。

ミサイルの破片の中に黒こげになった彼女のビキニが見つかった。僕は彼女の死体を眼に焼きつけた。

「彼女が死んだこと、ファンが知ったら大変なことになるぞ」写真集を企画した部長がつぶやいた。他人事の言い方だ。社会的事象について思い悩むより、まず彼女の死を悼むべきではないか。

「僕、撮影しちゃいました」アシスタントの男はデジタルカメラを持っていた。彼女が爆撃される瞬間を動画で撮影したという。彼は彼女の死体まで、カメラにおさめていた。

「撮影データを渡せ」部長がアシスタントに迫る。

「どうするつもりですか？ 処分するつもりじゃないでしょうね」

「ファンが見たら悲しむだろう。映像をどうするかは会社で決定する」

「渡したくないです。どうせ隠すつもりなんでしょ。データは渡しません。YouTubeでもアップしますよ」

「ふざけるなよお前、お前の意志でどうにかなる問題じゃないんだよ。おとなしくデータ渡せよ。こんな映像ネットに流出したら、ファンが怒るだけじゃすまされない。社会が混乱して、政権が崩壊するかもしれないぞ」

「だったらなおさら動画を出すべきでしょう。実際彼女は死んでしまったんだから。まさか、彼女がミサイルに当たって死んだことまで隠蔽するつもりじゃないでしょうね」

隠蔽はありえる話だ。政府にとっても、彼女の所属する事務所にとっても都合がよい。日本の人気アイドルが外国のミサイルに撃たれて死んでしまったなんて、社会的な衝撃が大きすぎる。マスメディアで人気の女性が一人死んだだけだが、戦争勃発の原因になりうる火種だ。危険な情報は、伏せて、行方不明になったとでも発表するつもりではないか。

「ぐだぐだ言ってないで渡せよ。カメラごとぶっ壊すぞ」部長がアシスタントに殴りかかった。頬を殴られたアシスタントが、部長の腹を蹴り上げた。

「二人とも、暴力はいけませんよ」僕は決まり文句の正論を言いつつ、二人の間に割って入った。二人を交互ににらみつける。「こんなことで、言い争っていたら、亡くなった彼女がかわいそうでしょう。まずは、亡くなった彼女を弔いましょう」

島から帰ってきた後、結局亡くなったアイドルは行方不明になったと報道された。ミサイルが落ちた島にいて、行方不明なんて、死んだんだろうとネット上で推測されたけれど、事務所は行方不明を貫き通した。

アシスタントが撮影した動画のデータは、部長が没収した。会社の上層部に提出されたかもしれないが、部長が没収したデータがどうなったかはわからない。

水着写真集撮影中に行方不明になったと事務所が発表してから二週間後、ネットに、爆撃の動画が流出した。投稿サイトから削除される前に僕も動画を視聴した。

動画は、写真集撮影中の場面から始まる。水着で悩殺ポーズを作る彼女をフィルムにおさめる僕の後姿も動画に映っていた。爆撃音が響く。カメラがぶれる。スタッフたちが散会する。カメラを持ったアシスタントも岩場に向けて走る。画面が大揺れした後、カメラが砂浜に一人佇むアイドルの姿を映し出す。

爆撃音が続く。海の家が燃える様子も映っている。カメラが、泣いているアイドルの顔をクローズアップで映す。画面が真っ白になる。爆撃音がする。そこで動画ファイルは終了する。

爆撃後の彼女の死体まで動画に収められているのを、爆撃当日、僕は見ていたが、投稿サイトにアップされているのはそこまでだった。動画でも、アイドルが爆撃で死んだのかどうかはわからなかった。

アシスタントとは連絡が取れていない。誰が投稿サイトにあの動画を投稿したのか、うちの会社の関係者なのか、詳細はわからない。僕も会社から取り調べの要請を受けている。アシスタントと仲のよかった僕は、疑われているだろう。

動画が流出した後も、事務所はアイドルの死を認めなかった。ワイドショーとニュースは、連日動画の話題で持ちきりだ。ネットでも盛り上がっている。僕は喧騒の様子をチェックしながらも、別のアイドルの写真を撮影しに、今日も国境間際の南の島へ向かうのだった。

(この文章はフィクションです。実在の人物・団体・組織とは一切関係がありません)

フィクションドキュメンタリー「就職できずホームレスになった学生」

新卒学生の就職率が、リーマンショック以降激減した。希望の企業から内定をもらえず、就職留年する大学生も多い。彼らは自分の希望する会社に就職できないという理由で、一年留年できる余裕がある。親から金銭的援助を受けるなり、アルバイトをするなどして、就職留年することができる。

経済的余裕のない学生は、希望しない、条件の悪い企業に就職するわけだが、一部の学生たちは、ホームレスとして生きる道を選択した。今回私たちは、内定がもらえずホームレスになった日本大和君（仮名）のホームレス生活取材した。

大和君は、有名国立大学の社会学部の出身で、大手マスコミ、出版希望だったが、就職活動一年目は、内定が出ずに就職留年した。二年目の就職活動でも、大和君に内定は出なかった。自分の希望しない会社、中小企業、収入面や労働面で条件の悪い会社ならいくらでもあったが、大和君は、ホームレスとして生きる道を選択した。

「何回も就職の面接で落ちていると、何で自分が落ちるんだろうって、毎回疑問がわいてくるんですよ。自分のどこがいけないのか、自分に何か悪い部分、足りないものがあるのかって、落ち込みが深まります。もちろん採用面接なんて、十名の募集に何千人という学生がエントリーしてくるし、偶然の要素も多いと思います。その企業の募集する人材に適しているかどうかを見ているんだろうけど、百社以上にエントリーして、全部不採用ってなると、自分の人格を否定される気持ちになってくるんです。そういうやりとりが全部嫌になったんですよ」と大和君は語る。

大和君は現在、都内地下鉄沿線の駅前の歩道に暮らしている。国道沿いで、深夜もトラックやタクシーの往来が激しい通りだ。平日朝と夕刻以降は、通勤客で歩道がごった返す。日中、大和君は、交差点近くの銀行の花壇に座り込んでいる。私たちが取材したのは、十一月、ちょうど風邪のはやっている季節だった。大和君は、土色に変色したコートを羽織って、花壇に座って背中を丸めていた。

「僕も風邪ひいちゃいました。風邪って、学校や会社や家の中だけではやるもんじゃないんですね。家で暮らしている人たちに風邪流行ってるんだから、ホームレスにも当然流行りますよね。ホームレスになる前、風邪をひいたら、部屋のベッドでぐっすり休んだり、医者に行ったり、ドラッグストアで薬買ったりできましたけど、いまじゃ、何もできません。風邪ひいてもいつもと同じ、こうやって路上で座り込むだけです。でもしょうがないですよね、僕がホームレスになりたいって思って選択したことだから。就職先ホームレスみたいなもんすかね（笑）。でも、ホームレスになる時は、風邪ひくことなんて想像してなかったもんな。もうちょっといろいろシミュレーションしてから選択した方よかったかな」時折咳きこみつつ、大和君が語った。

大和君同様、就職できずにホームレスになる若者の数が最近増加している。日本国内の不況は改善していない。政府は雇用対策を打ち出しているが、アジア市場で韓国、中国などの企業と戦っている日本企業は、グローバル市場で活躍できる国際的人材を厳選採用している。もちろんグローバルに展開している大企業以外にも、日本にはたくさんの企業があるが、安全安定志向の学生たちは、有名大企業への就職を目指している。それがまた過当競争と不採用の増加を招いている。

何故大和君は、就職も留年もせず、ホームレスになることを選んだのか。自分の望まない職種で、無名の中小企業で働く道を選ばなかったのか。「結局、働き始めたら、でっかいところも小さなところも一緒なんじゃないかって、思い始めたんです。まあそう思い始めた頃は、どこも採用してくれなくて、絶望感しかなくて、就職活動なんてもうやりたくないって思ったところですけど。疲れきるまで働いて、心身ともにストレスたまって、栄養ドリンクとかサプリメントとか風俗とかネットの無料動画とか向精神薬に頼る生活（笑）。物質的には豊かで満足してても、心は不満足のまま生きてくような未来が見えたんですよ。なんすかね、ちょっと宗教っぽい話になっちゃった？（笑） 僕は神様信じてませんよ。なんか何の救いも希望も見えないから、いっそこの社会から出てやろうって思ったんです」

大和君は、コンビニやスーパーや家庭ごみのごみ袋をあさって、残り物を食べて生きている。「まだまだ食べれる食品だらけですよ。食品の価格だいぶ安くなりましたけど、超安い食品が無料できれいなごみになってるんですから、もったいないですよ。飽食の時代だから、僕たちホームレスでも、通行人に恵みを求めずとも生きていけるんです」

番組取材中、大和君は、咳をしながら歩道の花壇に座っていた。大和君と同じように咳をしながら通行人が通りかかるが、誰も彼に声をかける人はいなかった。

夜二十三時前後になると、大和君はくすんだリュックサックから、ダンボールと青いビニールシートを取り出す。ダンボールは銀行脇の宝くじ売り場の前に敷く。ダンボールの上に寝そべて、体の上に布団代わりに青いビニールシートをかける。これでベッドの完成だ。夜二十三時前後では、まだ帰宅者が多い。地下鉄の入り口からは、ひっきりなしにスーツ姿の男女が降りてくる。大和君の近くにある美容院も電気がついており、見習いの美容師がカットの修行をしている。銀行のATMは深夜〇時まで稼働しているし、弁当屋、パチンコ店、ファミレスの電気も眩しい。

「おやすみなさい」という大和君に、眩しくないか聞いてみた。「まだ明るいですけどね、終電が終わると一気に人が減って、静かになりますよ。アーケードの明かりも弱まりますし、もうこれくらいの明かりになれちゃいました。人間なれば、どこでも生活していけますって！」

翌朝、朝七時過ぎ、大和君の暮らす歩道を訪ねた。大和君はダンボールとビニールシートをリュックの中に戻して、花壇に座っていた。

「おはようございます。いやあ人と挨拶するの久々だな。ホームレスになってから、誰とも話してないすもんね。気楽だし、おはようの挨拶とかめんどくせえって思ってたけど、たまにするといいもんすね」

朝の通勤者の数が少なくなると、宝くじ売り場のシャッターが開く。大和君は年末ジャンボ宝くじの売り場のそばで、ホームレスとして座り込む。

大和君だけではない。近くには何人かホームレスがいる。みな歳をとっており、大和君みたいな二十代の若者の姿はない。「まだ僕って少数派っていうか、ブームの先駆けみたいどころがあって、やっぱりホームレスの大半は五〇歳過ぎのおじいちゃんおばちゃんたちですね。たとえばほら、あそこのバス停の椅子に座っているおじいちゃん、バス着ても乗るわけないんだけど、ずっとバス停のベンチに座ってるんですよ。お金もパスモもないけど、町の人もバス会社の人も何も文句言わない。じいちゃんはずっと古い文庫本読んでる」

交差点を曲がったところにあるバス停に行ってみた。バス停のある歩道に、パイプ椅子が三個ほどおかれていた。一番端のパイプ椅子におじいさんが座っていた。おじいさんも大和君同様土色に変色した服を着ている。椅子の脇にはリュックや紙袋が何個もおかれている。おじいさんは大和君が言うように文庫本を読んでいた。数十年前に出版されたかのような土色の文庫本だ。バスが来ても、おじいさんはバスに乗らなかった。

「あのおじいさん、大人になって最初からホームレスだったわけじゃなくて、きっと何か仕事やったり、家族がいたりとか、したかもしれないすよね。今は身寄りのないホームレスだけど、突然ホームレスになったわけじゃない。なんか事情があると思うんですよ。僕はあえて聞きませんですけど」

(続くかもしれない)

(この文章はフィクションです。実在の人物・団体・組織とは一切関係がありません)